

「総長室突入」に 学生が集結！

大学を取り戻す闘いはここからさらに大きくなる！

熊野寮自治会

12月2日の昼休み、熊野寮祭企画「総長室突入」を行いました。湊総長ら大学経営陣（当局）が学生との対話を拒み続けていることに対して、以下の10の要求項目を掲げて声を上げる行動です。寮生に加え数百人規模の寮外生も参加し、大学当局への不満や怒りを示すものとなりました。

また、本部棟西側通用門では、当局が目論んだ警察の入構をスクラムを組んで阻止する一幕も。学生が団結すれば、管理強化を進める大学当局や国家権力から、学生の権利や学問の自由を守れることを示す行動にもなりました。

KULASIS に掲示が出ました！



KULASIS 掲示

「自治会としての責務を果たす意思と能力がない」などと言っていますが、学生の要求を再三無視している当局にこそ、責務を果たす能力はないと言えます。

【要求した10項目】

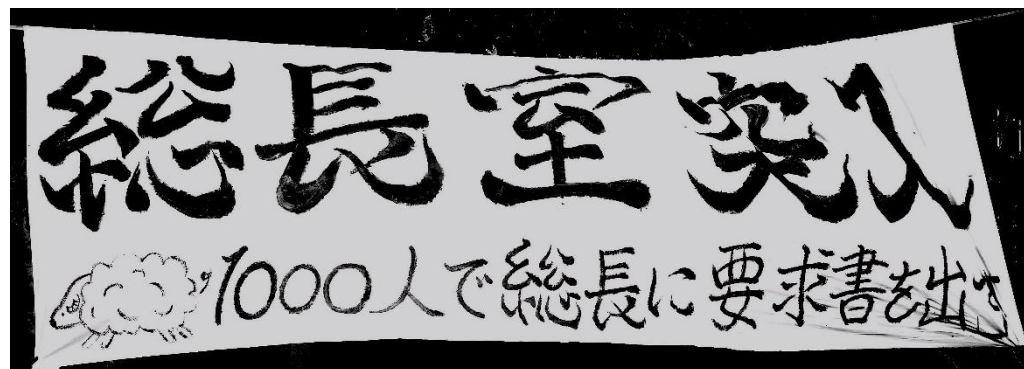
- ・保険診療所を廃止前と同水準で再開すること
- ・コロナ禍に乗じたサークル規制をやめること
- ・11月祭に対する介入をやめること
- ・学生自治寮への介入をやめること
- ・京都大学立看板規定を撤廃すること
- ・学生の活動に対する警察導入をやめること
- ・学生懲戒規定を撤廃し、2016年から続く学生処分を撤回すること
- ・学生の自由な活動を制限する一方的な授業改革（CAP制）をやめること
- ・教職員に対する非正規職化や雇用雇止めをやめ、無期雇用転換を積極的に行うこと
- ・各学生自治組織、並びに教職員組合からの団体交渉要求に誠実に応じ、

合意に基づいた大学運営を行うこと



声明文全文

（中文版、English ver）



学生の団結による大学運営へ：

全学自治会による大学の主権の確保

この日集まった学生の団結をもっと拡大した先に、総長の独裁に対抗できる全学自治会を再建し、大学の決定権を現場の人間が取り返し、国家権力の介入も拒否できる。そうした可能性の萌芽を生み出す行動になりました。

熊野寮自治会の主催に限らず、団結を拡大して現状を変えるための行動は、今後も繰り返し行われるでしょう。当局が一方的に大学のあり方を決め学生を管理しようとしている今の大学の状況に対して、不満や怒り、違和感といったさまざまな感情を抱いている全ての京大生の皆さんに、ともに立ち上がることを熊野寮自治会は訴えます！

クスノキ前での前段集会：学生・教員からの発言続々

12時の鐘が鳴ると同時に、クスノキ前で前段集会が始まりました。京大をめぐるさまざまな問題に取り組んできた学生以外にも、人間・環境学研究科の阪上雅昭先生や、中国政府のコロナ対策に乗じた人権侵害に抗議する「白紙革命」と呼ばれる行動を行う中国人留学生からも発言がありました。最後に熊野寮の学生が総長への要求書と要求項目を読み上げました。

そして数百人規模で集まった学生たちは、「寮祭貫徹！自治寮防衛！権力粉碎！総長出てこい！」と声をあげ、総長室のある本部棟へと向かいました。



マスクにサングラス姿の学生。事後処分を防ぐため、覆面している。↑顔を隠さないと自由に意見もできないのが、今の京都大学である。

本部棟1階を占拠：対話の拒否に怒る学生たち

本部棟に着くと、そこには当局の看板が設置してあり、「熊野寮の皆さんへ 厚生課へ行ってください」と書かれていました。学生らはこれに怒り心頭。これまで何度も厚生課の窓口を訪問し交渉を求めても、まともな返答もなく突き返されてきたからです。

厚生課には末端の職員しかおらず、決定権を持った総長や副学長に直接学生の声を届けることはできません。2016年ごろまでは総長団交や副学長情報公開連絡会など、学内の決定権を持つ理事の面々が直接学生と対話する機会がありました。それが一方的に停止され、大学当局が耳を貸さなくなっていることが問題なのです。だからこそ、総長に直接要求するというのが今回の目的であったにもかかわらず、改めて対話を拒絶されたことを受け、学生たちは本部棟に向かって抗議の声を上げました。

そして、学生を阻もうとする数人の職員との押し合いの末、学生たちは本部棟の中へなだれ込み、1階部分を占拠しました。エレベーターのあるホールへの入り口は施錠されて入れませんでしたが、すぐ足元まで自分たちに反対の声を上げる学生が押し寄せたことは、一方的な改革を独断で進める大学経営陣への強い牽制となったことでしょう。



警察の入構をとめる学生たち：これまでの限界を突破する

当局は警察に通報し公安警察・機動隊を学内に導入しました。

戦時中、国家や警察が大学に介入したことによって、学問の自由が侵害され国家の戦争政策に従うことを強制された反省から、警察入構を基本的に認めないのが当局が歴史的にとってきた態度です。しかし近年は学生の自主的な行動を圧殺するために、積極的に警察を呼ぶようになっています。導入された警察が守っているのは、全ての人々のためにあるはずの大学が、少数の理事たちによって私物化・独占され、政府や企業の利益が追求されている現状です。その一方で、学生は大学の意思決定から排除されています。執行部だけが「施設管理権」のもとに誰がどこに入っているかを決め、執行部の意向に反した使い方をした者には建造物侵入だと言って排除するようなあり方こそ、大学が私物化されていることの証左です。

しかし今回は、大学に入構しようとした警察を前に、西側の通用門付近の学生は即座にスクラムを組んで対峙し警察の入構を止めました。これまで当局の恣意的な警察導入により学生の行動が制限されてきましたが、今回は逆に警察の動きを学生が止めることに成功しました。学生の団結した力で、大学自治や学生自治を権力から守ることは可能であると明確に示したと言えます。